

英国貴族階級所帯内労働関係における呼称の検証

— 20世紀前半を時代背景とする映画を分析して —

北山 環

1. 序

文化人類学的観点からすると、人を呼ぶということは、間接的に相手に‘触れる’行為となるためにタブーに抵触する側面を持つ（滝浦, 2007: 34）という指摘がある。本稿で扱う貴族の所帯内における主人と召使との垂直型労働関係では、目上の相手に対しては対人的な距離を大きく取り、直接相手に‘触れない’敬避的な「遠隔化的呼称（敬称）」（ibid.）が使用され、逆に目下の相手には、相手の‘人’を直接名指しする共感的な「近接化的呼称（親称）」（滝浦, 2008: 78）が使われていることは容易に予測しうる。ここでの目的は、そのような両方向の非対称¹の呼称が具体的に誰に対してどのように使われているのかを映画の分析を通じて呈示し、呼称の選択を決定する要因を確認することである。

以下、第2章は呼称の定義と検証方法、第3章は呼称の選択要因、第4章は貴族階級と召使業務の構成、第5章は映画での呼称使用の実態把握、第6章は結語と続ける。

2. 呼称の定義と検証方法

2.1 呼称の定義

呼称には、大別して、‘address pronouns’（呼称代名詞）と‘nominal address forms’（呼称名詞）がある。本稿では、文脈から独立して²相手に直接呼びかけたり注意を喚起したりする際に使われる呼称名詞を分析対象とし、その区分として、各分析に当たっては、以下のLeech（1999: 110）の分類を用いる³ことにする。

- A. Endearments e.g. dear, sweetie
- B. Family terms e.g. father, mum
- C. Familiarizers e.g. girl, mate
- D. Familiarized first names e.g. Jackie, Lizzie
- E. First names in full e.g. William, Elizabeth
- F. Title and surname e.g. Mr. Wilson, Mrs. Bridges
- G. Honorifics e.g. sir, my lady

H. Others e.g. you, Uncle Joe

このうち、A から E は、「近接化的呼称（親称）」であり、F と G は、「遠隔化的呼称（敬称）」である。H は、その種類や使い方によってどちらに属するか判断されることになる。

2.2 検証方法

20 世紀前半の英国貴族所帯における主人と召使の関係が主に描かれている映画 6 本を選び、そこに現れる呼称を筆者の聞き取りによって抽出した。貴族階級の所帯では、正確に言うと、家族全員が貴族とは限らず⁴、映画毎のテーマによっては主人と召使との個人的な関係の発展により呼称に変化がみられる場合もあるが、分析条件に出来る限り一貫性を保たせるために、抽出対象を貴族所帯内の労働関係における主人家族と召使間、及び召使同士の呼称使用に限定した。

3. 呼称の選択要因

「遠隔化的呼称」であれ、「近接化的呼称」であれ、話し手と聞き手という発話に関わる両者間で同じ種類の呼称が使用されている場合は対等な関係を示していることになる。逆に、違う種類が用いられたら、両者間の相違を決定する何らかの要素が存在することになる⁵。その際、話し手が或る一つの呼び方を選ぶ要因として挙げられているものは、相手の情報の有無、社会的・職業上の地位、年齢、性別⁶、国籍の違い、親疎の度合などであり、それらが複合的に組み合わさった場合や話し手のパーソナリティーの影響 (Dunkling, 1990: 22-30) もある。加えて、怒りや愛情など、話し手のその場の高揚した感情も呼称の選択を大きく左右する⁷。(北山, 2010: 10)

4. 貴族階級と召使業務の構成

4.1 貴族階級の構成

騎士をその源流とする貴族 (peer, nobility) は、公爵 (Duke / Duchess)、侯爵 (Marquis / Marchioness, Marquise)、伯爵 (Earl / Countess)、子爵 (Viscount / Viscountess)、男爵 (Baron / Baroness) の 5 爵位であり、その他に貴族に準じる地位である准男爵 (Baronet / Baronetess) とナイト爵 (士爵, Knight) がある。19 世紀以前の伯爵以上の旧貴族はシノン (Sinon) と呼ばれる領地を有しており、The Duke of Norfolk のように呼び名に地名も用いられ、領土の特権所有が廃止された 19 世紀以降の新貴族とは区別される⁸。また、男爵には一代限り男爵 (Life peers, Baron) があり、ナイト爵は全て一代限りである⁹。Cooper (1980: 21) は貴族は人口の約 0.2% であると記しているが、現時点で、准男爵、ナ

イト爵を含めない世襲貴族の人口は、約 880 名¹⁰ (約 0.0014%) となっている。因みに、*Brideshead Revisited* の Lord Brideshead や *The Remains of the Day* の Lord Darlington は、それぞれ領地を称号に使用したり領地の保有をしたりし、‘Grace’ ではなく ‘Lord’ で呼ばれている¹¹ ことから、旧貴族の侯爵か伯爵の設定であると考えられる。*Gosford Park* の Sir William McCordle は、准男爵であり、その妻、Lady Sylvia McCordle は伯爵である Lord Carton の娘で、未亡人の伯爵夫人、The Countess of Trentham の姪である。*Upstairs Downstairs* の Lady Marjorie Bellamy は、伯爵家、The Earl and Countess of Southwold の娘だが、その夫で国会議員の Mr. Richard Bellamy は、地方の牧師の息子である。*The House of Elliott* の Lady Lydia は、その呼び名からすると、公爵か侯爵か伯爵の血筋を引く¹² と見なされる。*Maurice* の Clive Durham は、議員兼弁護士で上流階級に属してはいるが、称号は有していない。その妻の Anne は、Sir Woods を父に持ち貴族に準ずる家系出身である。このように、厳密に言えば、家族内にはいろいろな範疇の成員が存在することになる。

貴族、及びそれに準ずる人々の口頭での呼び名¹³ の例は以下の通りである。

<i>Nobility: Peers and peeresses</i>	
Duke (The Duke of (<i>Sinon</i>)) ¹⁴	Your Grace / Duke
Duchess	Your Grace / Duchess
Marquis (The Marquis of (<i>Sinon</i>))	My Lord / Your Lordship / Lord (<i>Sinon</i>)
Marchioness	My Lady / Your Ladyship / Lady (<i>Sinon</i>)
Earl (The Earl of (<i>Sinon</i>))	My Lord / Your Lordship / Lord (<i>Sinon</i>)
Countess	My Lady / Your Ladyship / Lady (<i>Sinon</i>)
Viscount (The Viscount (Family name))	My Lord / Your Lordship / Lord (<i>Sinon</i>)
Viscountess	My Lady / Your Ladyship / Lady (<i>Sinon</i>)
Baron (Lord (Family name))	My Lord / Your Lordship / Lord (<i>Sinon</i>)
Baroness	My Lady / Your Ladyship / Lady (<i>Sinon</i>)
<i>Minor nobility</i>	
Baronet (Sir (Full name))	Sir / Sir (First name)
Baroness	My Lady / Lady (Husband's family name)
Knight (Sir (Full name))	Sir / Sir (First name)
Knight's wife	My Lady / Lady (Husband's family name)

Eldest sons, younger sons, daughters of the nobility

(*Eldest sons of dukes, marquises and earls use their father's most senior subsidiary title as courtesy titles: note the absence of "The" before the title. If a daughter of a*

peer or courtesy peer marries another peer or courtesy peer, she takes her husband's rank. If she marries anyone else, she keeps her rank and title, using her husband's surname instead of her maiden name.)

Eldest son	Courtesy Marquis (Marquis of (<i>Sinon</i>))	My Lord / Lord (<i>Sinon</i>)
	Courtesy Earl (Earl of (<i>Sinon</i>))	My Lord / Lord (<i>Sinon</i>)
	Courtesy Viscount (Viscount of (<i>Sinon</i>))	My Lord / Lord (<i>Sinon</i>)
	Courtesy Baron (Lord (<i>Sinon</i>))	My Lord / Lord (<i>Sinon</i>)
Duke's younger son, (Courtesy) Marquis's younger son		My Lord / Lord (First name)
(Courtesy) Earl's younger son, (Courtesy) Viscount's son, (Courtesy) Baron's son		Sir / Mr. (Family name)
Duke's daughter, (Courtesy) Marquis's daughter, (Courtesy) Earl's daughter (unmarried or married to a commoner)		My Lady / Lady (First name)
(Courtesy) Viscount's daughter, (Courtesy) Baron's daughter (unmarried)		Madam / Miss (Family name)
(Courtesy) Viscount's daughter, (Courtesy) Baron's daughter (married to a commoner)		Madam / Mrs. (Family name)

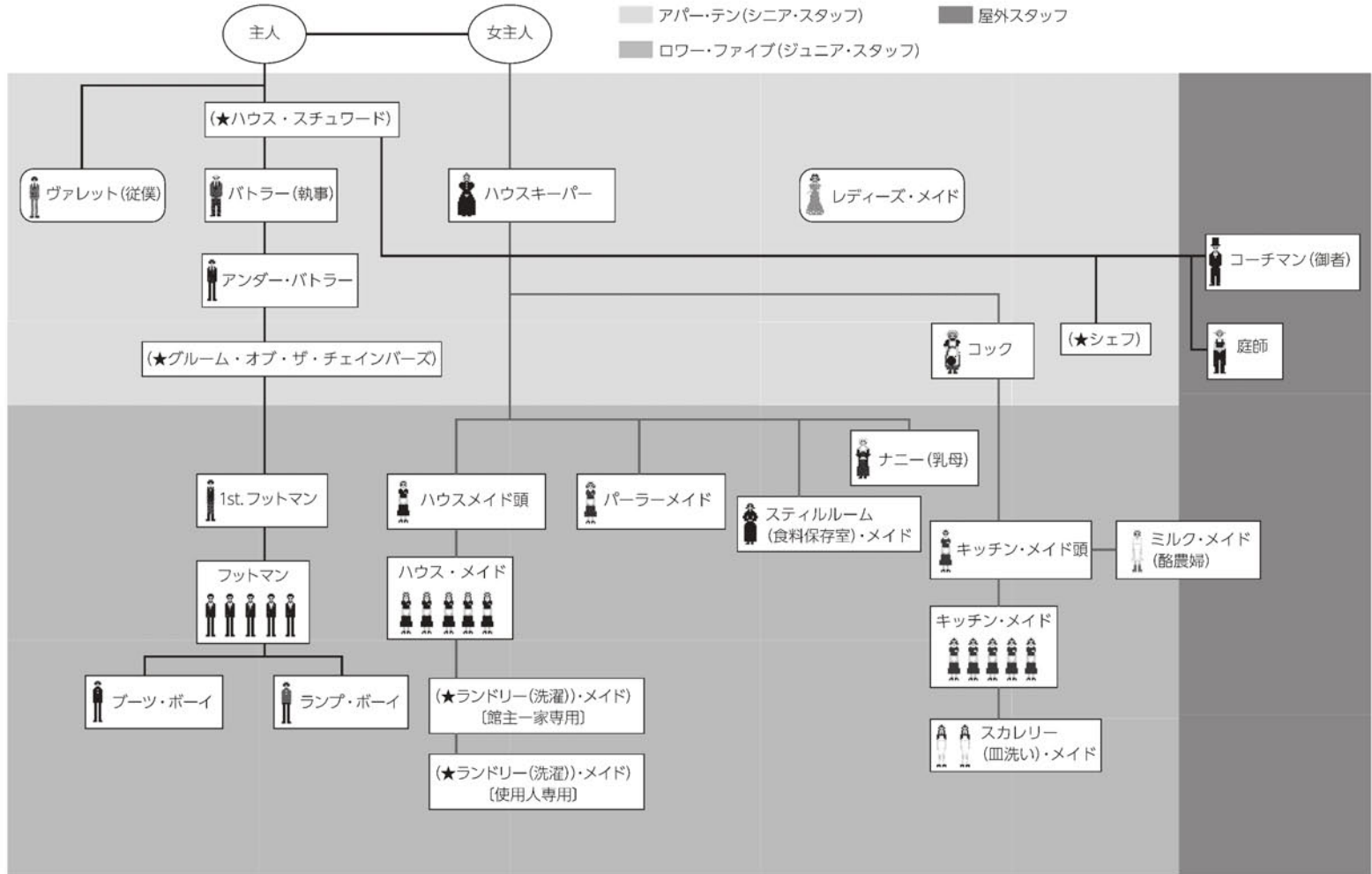
4.2 召使業務の構成

貴族の住居は、典型的には、地方の広大な敷地内に建つカントリーハウス（例：*Maurice* の Pendersleigh Park や *The Remains of the Day* の Darlington Hall)¹⁵ とロンドンのウエストエンドの高級住宅街にあるタウンフラット（例：*Upstairs Downstairs* の Eaton Place）であるが、どちらにも、数名から数十名に及ぶ使用人達が職域に応じて基本的には住み込みで働いていた。彼らの寝室は屋根裏部屋（コンピュータシステム研究所, 2007）であるが、仕事場は台所を中心とした地下（downstairs）であり、そこから上階（upstairs）に住む主人達の生活を支えていたのである（北山, 2007: 39）。*Gosford Park* に描かれているように、主人とともに他の所帯の館に滞在する時には、「Mr. / Miss & 主人の名前」で呼ばれ、個人としての自己が喪失してしまうことさえある。

'You are here as valet to Mr. Weissman. That means you will be known, below stairs, as Mr. Weissman for the duration of your stay.' (Fellowes & Altman, 2002: 8)

召使の典型的な業務内容と地位は以下の通り¹⁶である。

アパー・テン(シニア・スタッフ)
 屋外スタッフ
 ロワー・ファイブ(ジュニア・スタッフ)



執事 (Butler) は、元々、家計を含む所帯内外の業務を取り仕切るハウス・スチュワード (Steward) の下で中堅的な地位を持ち、主に食事、食品、ワイン関連業務を司る存在であったが、英国では19世紀ごろから所帯全体の召使いを統括するようになった¹⁷。女性の召使の最上位は、ハウスキーパー (Housekeeper) であり、家事全体を管理する立場にあった。執事の下にはフットマン (Footman) がおり、執事不在の折などには執事の業務を代わりに行うこともあった。主人と女主人にはそれぞれ、従僕 (Valet) とレディーズ・メイド (Lady's Maid) がついて、着がえなど個人的な要求に応じていた¹⁸。映画に登場する執事は、*Brideshead Revisited* の Wilcox、*Gosford Park* の Jennings、*Maurice* の Simcox、*The Remains of the Day* の Stevens、*Upstairs Downstairs* の Hudson である。ハウスキーパーは Mrs. Wilson (*Gosford Park*)、Miss Kenton (*The Remains of the Day*)、クック (Cook) は、Mrs. Croft (*Gosford Park*)、Mrs. Bridges (*Upstairs Downstairs*)、従僕は、Probert (*Gosford Park*)、レディーズ・メイドは、Lewis (*Gosford Park*)、Roberts (*Upstairs Downstairs*) である。彼らは 'Upper Ten' と呼ばれるシニア・スタッフであり、ジュニア・スタッフである 'Lower Five'¹⁹ の、パーラーメイド (Parlourmaid) の Rose や Sarah (*Upstairs Downstairs*)、ヘッド・ハウスメイド (Head Housemaid) の Elsie (*Gosford Park*)、フットマンの George や Arthur (*Gosford Park*) や Alfred (*Upstairs Downstairs*)、キッチン・メイド (Kitchen Maid) の Bertha (*Gosford Park*) や Emily (*Upstairs Downstairs*) らを、上役として指導、管理する立場にある。

5. 映画での呼称使用の実態把握

呼称を検証するにあたって、主人から召使へ (力関係：上→下)、召使から主人へ (力関係：下→上)、召使同士で使われた呼び方の3区分に分けて抽出を行った。

5.1 主人から召使への呼称

Addressee	呼称の種類 [例]	頻度
Butler	H : Others (Family names only) [Hudson, Stevens]	45
Valet, Lady's Maid	H : Others (Family names only) [Probert, Roberts]	5
Maid, Coachman	E : First names in full [Chalmers, Rose]	21
Housekeeper, Cook	F : Title & Surname [Mrs. Wilson, Miss Kenton, Mrs. Bridges]	5
Maid	A : Endearments [Dearest]	2
Nanny	H : Others [Nanny]	2

執事に対しては、主人、女主人、その子供達ともに例外なく名字の呼び捨てが使われている。従僕やレディーズ・メイドもそれぞれの主人から名字の呼び捨てで呼ばれている。名字の呼び捨ては主に男子校や軍隊などの厳しい規律のある男性集団で用いられ、上下関係を明確にする呼び方である²⁰。同じシニア・スタッフであっても、レディーズ・メイド以外の女性には名字の呼び捨てではなく、敬避的な呼び方である「タイトル & 名字」が使用されている。ハウスキーパーの Mrs. Wilson (*Gosford Park*)、Miss Kenton (*The Remains of the Day*)、クックの Mrs. Croft (*Gosford Park*)、Mrs. Bridges (*Upstairs Downstairs*) がその例である。その際のタイトルの選択は、結婚の有無ではなく、年齢によるものである。Mrs. Wilson、Mrs. Croft、Mrs. Bridges は高年齢の女性であり、いずれも未婚である。一方、ジュニア・スタッフは親称の個人名で呼ばれ²¹、特に、*Upstairs Downstairs* のパーラーメイドである Rose に対して、主人 Bellamy の娘の Elizabeth は親しさをこめて 'Dear' 'Dearest' を使っている。

5.2 召使から主人への呼称

Addressee	呼称の種類 [例]	頻度
主人、息子	G : Honorifics [sir]	49
主人、息子	G : Honorifics [my lord / milord]	30
息子	H : Others (Title & First name) [Mr. James]	1
女主人、娘	G : Honorifics [my lady / milady]	85
女主人	G : Honorifics [your ladyship]	4
娘	H : Others (Title & First names) [Miss Isobel]	23
娘	H : Others (Title) [Miss]	17
娘	H : Others (Title & Familiarized first names) [Miss Lizzie]	10

'my lord' 'sir' と呼ばれているのは、*Brideshead Revisited* の Lord Marchmain、長男 Lord Brideshead、次男 Sebastian Flyte、*The Remains of the Day* の Lord Darlington である。*Gosford Park* の Sir William McCordle も一度、執事の Jennings から 'my lord' と呼ばれているが、前述のごとく、正式には、准男爵は、'my lord' とは呼ばれない。主人であっても貴族ではない *Upstairs Downstairs* の Bellamy や *The Remains of the Day* の Lewis²² に対しては、'my lord' は使われず、'sir' のみが用いられている。同様に、'my lady' 'your ladyship' は、貴族である *Brideshead Revisited* の Lady Marchmain、*Gosford Park* の Lady Trentham、Lady McCordle、*The House of Eliott* の Lady Lydia、

Upstairs Downstairs の Lady Marjorie の呼び掛けに使用されている。貴族の娘である *Brideshead Revisited* の Julia も ‘my lady’ と呼ばれている。Sebastian や Julia が、‘my lord’ ‘my lady’ と呼ばれている一方で、*Upstairs Downstairs* の Bellamy の子女、James や Elizabeth にはそれらの呼び名が使用されないのは、年齢的な理由ではなく²³、彼らの父が貴族ではないからである。*Gosford Park* の Sir William McCordle の娘の Isobel と同様に、‘Mr. / Miss & First name’ ‘sir / miss’ で呼ばれる。*Upstairs Downstairs* の Rose は、Elizabeth ととても親しい関係にあり、時には年上の友達のように諫めたり叱ったりすることから、‘Title & Familiarized first name’ の ‘Miss Lizzie’ を使うことがある。

今回の抽出では、男性の貴族に対しては、‘my lord’ と ‘sir’ の両方が用いられていたが、女性の貴族に対しては、‘my lady’ と ‘your ladyship’ が使われ、‘ma’am’ は検出されなかった。‘lordship’ と ‘ladyship’ は、‘-ship’ が語源的に “state, condition of being”²⁴ を表すことから、‘lord’ と ‘lady’ という地位を状態化し、更に相手との距離を大きく取る呼称である。それ故に、通常、貴族相手に直接呼び掛ける呼称として ‘sir’ や ‘ma’am’ と同様に用いられる ‘my lord’ や ‘my lady’ とは少し用法を異にし、‘your lordship / ladyship’ は、文脈の中で ‘you’ の代わりに使用される場合が多い²⁵。呼び掛けで使われている例は、*Gosford Park* において Lady McCordle が客の食事に関して階下の ‘Servants’ Hall’ に急に下りてきて客の使用人も含めた場所であわてている時に、ハウスキーパーの Mrs. Wilson が毅然として発した、‘Everything’s under control, your ladyship.’ (Fellows & Altman, 2002: 38) や、*Upstairs Downstairs* で赤ん坊誘拐の事件を起こした Bridges と彼女をかばう Hudson に気遣いを見せた Lady Marjorie に対し、二人が謝意を表す際に用いる言葉に見られる。また、*Gosford Park* で、主人の召使が来賓に向かって使用する場合や、*The House of Eliott* で Evangeline が顧客に対して呼び掛ける時にも使われている。いずれの場合も話し手の聞き手に対する一層の心理的な距離感が醸し出されている。尚、その場にはいない第三者として文脈に使用する場合は、‘he’ ‘she’ の使用箇所にも、‘his lordship’ ‘her ladyship’ が使われる。

‘His lordship has always striven to aid better understanding between nations.’

(Ishiguro, 1988: 225)

‘Her ladyship used to have a French maid who wore a black one like this.’

(Fellows & Altman, 2002: 10)

5.3 召使間の呼称

Addressee	呼称の種類 [例]	頻度
Butler	F : Title & Surname [Mr. Stevens, Mr. Hudson]	64
Butler	G : Honorifics [sir]	3
Housekeeper	F : Title & Surname [Mrs. Wilson, Miss Kenton]	49
Cook	F : Title & Surname [Mrs. Croft, Mrs. Bridges]	6
Cook	H : Others [Mrs. B]	1
Cook	A : Endearments [dear]	1
Lady's Maid	F : Title & Surname [Miss Roberts]	1
Lady's Maid	G : Honorifics [Miss]	1
Lady's Maid	H : Others (Family names only) [Roberts]	2
Lady's Maid	H : Others (Swear Words) [Woman, Old Cow]	2
Coachman	F : Title & Surname [Mr. Pearce]	4
Chauffeur	H : Others (Family name only) [Merriman]	1
Maid, Footman	E : First names in full [Mary, Rose, Charles]	26
Maid, Footman	D : Familiarized first names [Lizzie, Charlie]	6
Maid, Footman	A : Endearments [love, my dear]	5
Maid, Footman	C : Familiarizers [boy, girl]	7

召使同士の呼び方は、殆どその業務構成により決定されている。つまり、‘upper servants’ であるシニア・スタッフの執事、ハウスキーパー、クック、従僕、レディー・メイド²⁶ は、下役からも同僚からも「タイトル & 名字」の「遠隔化的呼称（敬称）」で呼ばれる。*Upstairs Downstairs* で新入りのアンダー・パーラーメイド見習いの Sarah から ‘Cook’ と言われ、Bridges は、‘And it’s Mrs. Bridges, if you please, not “Cook”. This is a gentleman’s house.’ と憤慨している。*The Remains of the Day* のアンダー・パトラーである Stevens の父の呼び方を巡る Stevens と Kenton の争いは、年齢上、職業経験上の先輩に対する敬称使用か部下としての親称使用かの対立である。

‘In other houses, I was accustomed to address the servants by their Christian names.’

‘Uh, Miss Kenton, if you would stop to think for a moment, you would realise that ... how inappropriate it is for one such as yourself to address William someone such as my father.’

クックである Bridges が ‘dear’ と呼ばれるのは、*Upstairs Downstairs* で同僚のレディーズ・メイドの Roberts によってであり、Roberts が呼び捨てやののしりの言葉で呼ばれるのは、同僚の Bridges や下役のフットマン、メイドの怒りをかった場面である。また、*Upstairs Downstairs* で Hudson、Roberts、Bridges は馬舎で生活する屋外スタッフのコーチマンを ‘Mr. & 名字’ で呼んでいる。

ジュニア・スタッフのメイドやフットマンへの呼び掛けは、上役や同僚からファーストネームなどの「近接化的呼称（親称）」を使って行われる。*Upstairs Downstairs* でメイド見習いの Sarah が ‘Clemont’ というフランス名で呼ばれることを希望した時、女主人の Lady Marjorie も、召使仲間の Bridges 達も、「召使の名前らしくない」という理由で拒絶し、Sarah を使用している。

6. 結語

今回の抽出結果から以下のことが明らかになった。

(1) 主人から召使への呼称

- ・執事は主人、女主人、子女を問わず例外なく名字のみで呼ばれている。
- ・従僕・レディーズ・メイドはそれぞれの主人から名字のみで呼ばれている。
- ・女性のシニア・スタッフのうち、ハウスキーパーやクックは ‘Mrs. / Miss & 名字’ で呼ばれている。
- ・ジュニア・スタッフはファーストネームで呼ばれている。

(2) 召使から主人への呼称

- ・准男爵も含めて、主人は ‘my lord’ ‘sir’ で呼ばれている。
- ・世襲貴族の息子は ‘my lord’ ‘sir’ と呼ばれている。
- ・貴族の女主人は ‘my lady’ ‘your ladyship’ と呼ばれている。
- ・貴族の娘は ‘my lady’ ‘your ladyship’ と呼ばれている。
- ・准男爵の娘や父親が貴族ではない家庭の子女は ‘Mr. / Miss & ファーストネーム’ ‘sir / miss’ で呼ばれている。

(3) 召使同士の呼称

- ・執事は、部下から ‘Mr. & 名字’ ‘sir’ で呼ばれている。
- ・ハウスキーパー、従僕、レディーズ・メイド、クックのようなシニアスタッフは同僚と部下から ‘Mr. / Mrs. / Miss & 名字’ で呼ばれている。
- ・ジュニア・スタッフは上司及び同僚から、ファーストネーム、‘Endearments’、

‘Familiarizers’ を使って呼ばれている。

主人と召使間の呼称については、上から下へは直接的な「近接化的呼称」、下から上へは敬避的な「遠隔化的呼称」が使用され、非対称となっているが、例外は、女性のシニア・スタッフに対して、主人側からも「遠隔化的呼称」が使われていることである。名字だけの呼び捨ては、力関係（Brown & Levinson, 1987: 77）を強力に意識させるものではあるが、一方で、主人に最も近い立場で仕える執事や従僕やレディーズ・メイドへの親近感も表していると言える。その意味で、日常的に絶えず主人の身近にいるわけではない上位の女性召使が特に高齢の場合、主人側からも距離を置く呼び名が使われているのは理解し難いことではない。

垂直型上下関係で規律を統制する召使の領域でも主人と召使間の呼称と同様に、上役から下役には「近接化的呼称」、下役から上役には「遠隔化的呼称」が使用されている。そして、ここでも女性のシニアスタッフは上司の執事や同僚から、「タイトル & 名字」の敬称で呼ばれている。

以上のことから、本稿の分析では、話し手による呼称の選択要因を、基本的には、社会的・職業的地位による力関係を軸として、そこに年齢、性別、親疎の度合が追加要素としてつけ加わったと結論付けることが出来る。

注

- 1 1980年代以降のビジネス界をテーマとするイギリス映画分析では、上役、同僚、部下間でファーストネームで呼び合う「水平型」、両方向対称の呼称構造が認められた。(北山, 2010: 8)
- 2 'free forms of address: "outside" the sentence construction' (Braun, 1988: 11)
'...a nominal constituent loosely integrated with the rest of the utterance.' (Leech, 1999: 107)
- 3 分類中の例は筆者が追加したものも含まれている。尚、Braun (1988: 10) は、任命や相続によるタイトル (doctor, mayor, duke 等)、職業の名称 (waiter, chauffeur 等) を、McConnell-Ginet (2006: 78) は、名字のみ (Robinson 等)、ニックネーム (Teddy Bear 等)、ののしり (bastard 等) を加えている。
- 4 イギリスの貴族において正式な貴族 (peer) は当主一人であるが、その家族も身分に従った儀礼的な称号 (courtesy title) で呼称される。伯爵 (Earl) 以上の貴族で、複数の爵位 (subsidiary titles) を有する場合、その継嗣者は当主の本爵位以外のいずれかの爵位を名乗ることが出来る。それ以外の子女や子爵以下の貴族の全ての子は、当主の身分に準じて、Lord、Lady、Honourable の称号が許される。あくまで儀礼称号は特定の爵位、またはそれに関連する称号を称することを許されたに過ぎず、身分は平民 (Commoner) である。なお、貴族の当主の夫人の称号 (伯爵夫人など) は正式な称号である。しかし、自らの権利で爵位を有する女伯爵などとは区別される。
(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%84%80%E7%A4%BC%E7%A7%B0%E5%8F%B7> January 6, 2011) 更に結婚等で貴族と平民が同所帯を形成する場合もある。
- 5 In the tradition of Brown/Gilman (1960) and Brown/Ford (1961), it has become customary to view reciprocity of address in a dyad (i.e., exchange of the same variant) as a signal of equality, real or pretended. Nonreciprocity has been interpreted as an expression of difference in age, status, or whatever. (Braun, 1988: 293)
- 6 ... intimacy and distance are determining the selection in symmetrical relationships. Nonreciprocity of FN and TLN is caused by differences in age or professional status. (Braun, 1988: 16)
... asymmetrical exchanges were found where there was age difference or occupational rank difference. (Ervin-Tripp, 1989: 218)
Nominal address forms in English are a particularly heterogeneous group, with a

- range of terms whose use varies according to factors such as domain, relationship between speaker and addressee, and various speaker characteristics such as age and sex. (Clyne, Norrby & Warren, 2009: 18)
- 7 The decision as to what mode(s) of address to employ can be determined by rational choice or spontaneous emotional reactions. (Clyne, Norrby & Warren, 2009: 79)
 - 8 (http://www003.upp.so-net.ne.jp/detective_story/memo/memo08_aristocrat.htm January 6, 2011)
 - 9 英国爵位名一覧 (http://biofantasy.fe2web.com/kikaku/shakui_eng_base.html January 7, 2011)
 - 10 *ibid.*
 - 11 His / Your Grace が公爵の称号で、Lord は、侯爵、伯爵、子爵、男爵の称号。... Lord なら名字を、Sir の場合はファーストネームをつけて呼び... (<http://yaplog.jp/chatbrun/archive/582> January 6, 2011)
 - 12 公爵か侯爵か伯爵の娘は My Lady か Lady Mary (‘Lady & First name’) と呼ばれる。 (http://en.wikipedia.org/wiki/Forms_of_address_in_the_United_Kingdom January 6, 2011)
公爵夫人は Her / Your Grace、侯爵、伯爵、子爵、男爵夫人は ... ‘Lady & 名字’、或いは ‘Lady & 領地’、或いは ‘Lady & 夫の名’ ... 公・侯・伯爵令嬢につく Lady の場合は、Lady Diana のようにファーストネーム.... (<http://yaplog.jp/chatbrun/archive/582> January 6, 2011)
 - 13 (http://en.wikipedia.org/wiki/Forms_of_address_in_the_United_Kingdom January 6, 2011)
 - 14 括弧内の爵位名は (<http://web.thn.jp/blueleo/nobletitle.htm> January 6, 2011) による。尚、子爵と男爵の通常の呼び名は、同サイトでは、Lord (*Sinon*) ではなく、Lord (Family name) を挙げている。領地保有が伯爵以上であるとすれば、こちらの指摘の方が正しい。
 - 15 元々荘園領主の館である「マナーハウス」では、「ホール」と呼ばれる「大広間」がその中心であったことから、カントリーハウスにはよく「ホール」という名称が付いている。また、広大な敷地を表す「パーク」という名前が付いていたりする。(三谷, 2000: 99-108)
 - 16 (http://blogimg.goo.ne.jp/user_image/73/8e/9e2d9a3a3eb05d08ee7cd5f5be00ce9da.png January 6, 2011)

- 17 2007年現在で英国には5,000人の執事がいると推定されている。(http://en.wikipedia.org/wiki/Butler January 7, 2011)
- 18 *ibid.*
- 19 (http://blog.goo.ne.jp/countsheep99/e/b7a69feb6930b62487a5e5de79021950 January 6, 2011)
- 20 名字の呼び捨ては 親近感を表す使用法もある。例えば、*Bridget Jones: The Edge of Reason* (2005) で個人的にも親しい上司 Cleaver が Jones に呼び捨てを使っている。
- 21 *Gosford Park* で、Lady Trentham は、義理の甥の McCordle から Constance と呼ばれることを好まない。仕送りを受けていることも影響して見下されているように感じるのである。‘If he has to call me by my Christian name, why can't he make it “Aunt Constance”? I'm not the upstairs maid.’ (Fellowes & Altman, 2002: 3)
- 22 原作 (Ishiguro, 1988) の小説では、Darlington Hall の新しい私有者はアメリカ人の Mr. Farraday であるが、映画では、かつて当地を訪れ、Lord Darlington に厳しい意見を述べたアメリカの議員、Mr. Lewis となっている。Stevens が主人から借りて Kenton に会いに行く車も、Ford ではなく、映画では、Daimler である。
- 23 十代の娘である Cordelia (*Brideshead Revisited*) は、Nanny から ‘ladyship’、Nurse から ‘Lady Cordelia’ と呼ばれている。
- 24 (http://dictionary.reference.com/browse/-ship January 7, 2011)
- 25 In the Courts of England and Wales judges of the higher courts are addressed as “My Lord” or “My Lady” and referred to as “Your Lordship” or “Your Ladyship” . (http://en.wikipedia.org/wiki/Judge January 6, 2011)
- “I marvel your ladyship takes delight in such a barren rascal...” (Shakespeare, W. *Twelfth Night* Act 1 Scene 5 http://shakespeare.mit.edu/twelfth_night/twelfth_night.1.5.html January 6, 2011)
- “I assure your ladyship I have as good an opinion of her as your ladyship yourself or any other can have (Fielding, H. *Joseph Andrews* Book 4 Chapter 2 <http://www.readbookonline.net/read/9400/22384/> January 6, 2011)
- “...your ladyship can hardly expect me to own it.” (Austin, J. *Pride and Prejudice* Chap. 29 <http://chestofbooks.com/novel/Pride-and-Prejudice-Jane-Austin/Chapter-29-Continue...> January 6, 2011)
- 26 レディース・メイドの Roberts (*Upstairs Downstairs*) は、高年齢であるが未婚であるためか、他の例と違い、‘Miss’ で呼ばれている。

Featured Films

- Brideshead Revisited*. (1981). Directed by Michael Lindsay-Hogg and Charles Sturridge. Based on the Novel by Evelyn Waugh. Teleplay by John Mortimer. Granada Television.
- Gosford Park*. (2001). Directed by Robert Altman. Screenplay by Julian Fellowes. USA Films.
- House of Eliott, The*. (1991). Directed by Rodney Bennett and Jeremy Silberston. Written by Evgeny Gridneff et al. BBC.
- Maurice*. (1987). Directed by James Ivory. From the Novel by E. M. Forster. Screenplay by Kit Hesketh-Harvey. A Merchant Ivory Film.
- Remains of the Day, The*. (1993). Directed by James Ivory. Based on the Novel by Kazuo Ishiguro. Screenplay by Ruth Prawer Jhabvala. Columbia Pictures, Inc.
- Upstairs Downstairs*. (1971). Directed by Derek Bennett et al. Written by Alfred Shaughnessy et al. ITV.

《参考文献》

- Braun, F. (1988). *Terms of Address: Problems of patterns and usage in various languages and cultures*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Brown, R. & Ford, M. (1961). Address in American English. *Journal of Abnormal and Social Psychology* 62: 375-385.
- Brown, R. & Gilman, A. (1960). The pronouns of power and solidarity. In T. A. Sebeok (ed.) *Style in Language*. (pp. 253-276). London: Wiley & Sons.
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1978/1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clyne, M., Norrby, C. & Warren, J. (2009). *Language and Human Relations: Styles of address in contemporary language*. NY: Cambridge University Press.
- Cooper, J. (1980). *Class*. London: Corgi Books.
- Dunkling, C. (1990). *A Dictionary of Epithets and Terms of Address*. London: Routledge.
- Ervin-Tripp, S. (1972/1989). On sociolinguistic rules: Alternation and co-occurrence. In J. J. Gumperz & D. Hymes (eds.) *Directions in Sociolinguistics: The*

- ethnography of communication* (pp. 213-250). Oxford: Basil Blackwell.
- Fellows, J. & Altman, R. (2002). *Gosford Park*. New York: Newmarket Press.
- Ishiguro, K. (1988). *The Remains of the Day*. New York: Vintage International.
- Leech, G. (1999). The distribution and function of vocatives in America and British English conversation. In H. Hasselgård & S. Oksefjull (eds.) *Out of Corpora: Studies in honour of Stig Johansson* (pp. 107-118). Amsterdam: Rodopi.
- McConnell-Ginet, S. (2003/2006). "What's in a name?" : Social labeling and gender practices. In J. Holmes & M. Meyerhoff (eds.) *The Handbook of Language and Gender* (pp. 69-97). Malden, MA: Blackwell Publishing.
- 北山環 (2007).「イギリス映画に見るリクエスト表現の一考察— 20 世紀初期の 'Upstairs' 'Downstairs' における談話を分析して—」『近畿大学語学教育部紀要』第 7 巻第 2 号
- 北山環 (2010).「呼称に見られる「建前」と「本音」—映画のビジネス場面における呼び名を分析して—」『語学教育部ジャーナル』第 6 号
- コンピュータシステム研究所 (2007).「建築 e-ラーニング」(http://www.stagevision.jp/e_learning/column-38.html November 1, 2007)
- 滝浦真人 (2007).「呼称のポライトネス— “人を呼ぶこと” の語用論」『月刊日本語』 Vol. 36 No. 12: 32-39.
- 滝浦真人 (2008).『ポライトネス入門』東京：研究社
- 三谷康之 (2000).『イギリスを語る映画』名古屋：スクリーンプレイ出版